

『クロニカ・メヒカーナ』について

『クロニカ・メヒカーナ (*Crónica mexicana*, 以下 CM)』は、16 世紀末にテノチティトランのメシーカ王家の子孫であるエルナンド・デ・アルバラード・テソソモク (Hernando de Alvarado Tezozómoc) が編んだとされる歴史記録である。いわゆるアステカ王国 (1430 年頃～1521 年) の中核を担ったテノチティトランの繁栄の歴史を、メシーカ王家の視点から述べたものである。

『CM』は、メシーカ人の歴史を 112 章にわたってスペイン語で叙述したもので、ごく一部の章を除きほとんどの部分が現代に伝わっている。数百年もの間、写本という形のみで伝えられていたこの史料は、19 世紀に初めて公刊された。メキシコ国内での最初の出版は、1878 年、メキシコの国立総合文書館 (AGN) の写本に基づいたマヌエル・オロスコ・イ・ベラが公刊したテキストである。このテキストは、ポルーア社で版を重ね、これまでもっとも読まれる機会の多いものとなっている。

『クロニカ・メヒカーナ』と類似した記述内容を含む史料がいくつか存在する。ディエゴ・ドゥラン師の『インディアス誌』はその代表例である。同じ情報源に基づくと思われる複数の史料の存在は以前から指摘されてきたが、1945 年にメキシコ研究者のロバート・H・バーロウがそれらに共通する情報源としての『クロニカ X』という仮説を立てた。この『クロニカ X』説には様々な修正や追加の提案がなされてきたが、何らかの情報源 (ただしクロニカではなく口承伝統と考える研究者もいる) から『クロニカ・メヒカーナ』を含む複数のクロニカが書かれたという考えは概ね研究者の意見の一致を見ている。

AGN 写本に基づく上記の版が最も読まれてきた一方、1997 年と 2021 年には現存する最も古い手稿) に基づいた版が出版された。「クラウド手稿 117」と呼ばれるこの手稿は、米国議会図書館に所蔵されているもので、テソソモク自身の筆によるものではないものの、AGN 写本よりも原本に近い内容を保っていると考えられている。そのため、本翻訳プロジェクトでは、この手稿に基づいた校訂版を底本としている。

20 世紀後半以降、植民地時代メキシコの先住民史料の研究が進められていく中で、『CM』の研究も着実に重ねられてきた。メキシコ国立自治大学のホセ・ルベン・ロメロ・ガルバン (José Rubén Romero Galván)、国立人類学歴史学研究所のクレメンティーナ・バトコク (Clementina Battcock)、メキシコ国立自治大学のガブリエル・K・クルエル (Gabriel K. Kruell) らが現在の代表的な研究者である (詳細は下記リンクの文献リストを参照)。現在、『CM』はアステカ期の歴史を研究する上で、『フィレンツェ文書』と並んで欠かすことのできない重要史料と見なされている。

文責：井上幸孝 (専修大学)